



審査を終えて

第三十九回展 大会審査部長

加藤 東陽

栄えある高田宮賞をはじめ、各賞を受賞された皆様にご心からお祝い申し上げます。

第三十九回高田宮杯日本武道館書道大展覧会は、新型コロナウイルスの感染拡大状況を見ながらも、硬筆・毛筆共に、北海道から沖縄まで全国各地からの出品があり、その数も昨年を上回るなど、一層充実して実施することができました。皆様の熱意とご支援に厚く御礼申し上げます。

本年度は、毛筆の部一万四千七百六十五点、硬筆の部七千四百二十九点、合計二万二千百九十四点（昨年比四百三十二点増）の出品がありました。この中で、今年も外国から百七十八点、そして特別支援学校等からも十三点の力作が寄せられたことや、毛筆の部では八十七歳の方が、硬筆の部でも八十七歳の方の作品が入賞されたことも特記されましょう。

審査は、六月二十五日（日）、日本武道館第一、第二小道場において、「一流一派に偏ることなく公平・中正に」という審査方針のもと、毛筆の部十九名、硬筆の部八名の審査委員によって厳正に行われました。

次に、各部門の審査所感を述べます。

〈毛筆の部〉

○幼児・小学校・中学校部門Ⅱ全国的に多様多彩で幅のある作品が見られ、本展覧会の趣旨にかなった良い傾向でした。少数ですが、補筆（二度書き）をしている作品が見られたのは残念でした。

○高校部門Ⅱ時間をかけて書いた作品は、感覚的に一、二枚書いて出したと思われる作品よりも好感を持ってました。また、臨書作品が多く出品されていましたが、創作作品にも積極的に取り組んでほしいと思います。

○大学・一般部門Ⅱ今回は、例年より創意・創作性に富んだ優れた作品が多く、また、臨書にも行・草・篆・隸と様々な作品があり、嬉しく思いました。

〈硬筆の部〉

○幼児・小学校・中学校部門Ⅱ点画を一画ずつバラバラに書いたような作品よりも、筆脈の通った作品が上位作品に選ばれました。○高校・大学・一般部門Ⅱ特に、落款が本文に較べて小さく書かれていたり、余白の狭い作品が多く見受けられました。また、今回は高校生に較べ、大学・一般部門の方が良い作品が多い印象でした。

最後に、わずかな差で入賞を逃した作品が少なかつたことを付記しておきます。

本展覧会が書写書道教育の一環として、文字文化を大切にして益々充実発展していきますよう、皆様の一層のご支援とご協力をお願いし、講評と致します。